

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00404

研究課題名(和文) 冷戦期の日米文化外交と国民文学の必要性 国民作家フォークナーの創生

研究課題名(英文) U.S. Cultural Diplomacy toward Japan and the Necessity of National Literature:
Creating a National Writer of Faulkner

研究代表者

森 有礼 (MORI, ARINORI)

中京大学・国際学部・教授

研究者番号：50262829

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、冷戦期の日米両国における国民文学創生の必要性とその意義について、ウィリアム・フォークナーの政治的及び文化的役割に着目しつつ、特に日米における南部文学の国民文学化という観点から再検証した。反共イデオロギーを体現するこの作家の1950年代の活動によって日米の冷戦イデオロギーは脱政治化され、且つモダニズム文学を人間主義に基づく文学形式として制度化することとなった。こうした戦後の状況と日米のフォークナーの需要と受容を批判的に検証することで、日本の南部文学研究が、フォークナーを戦後の日本を牽引する国民作家として再定義し、ポストコロニアル的状况に自ら参入していったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、冷戦期の日米両国におけるフォークナーの政治的及び文化的役割について、国内外でほぼ初めて批判的な検証を行った点にある。米国におけるフォークナーの批判的再評価の現状を確認し、フォークナーの「脱政治化」が当時の冷戦外交の目的であり、そのために彼が国民作家とされたと共に、作家がその期待にいかに応えたかが明らかになった。またその社会的意義としては、フォークナーの日本訪問が与えた文化的・社会的影響が確認され、それは戦後の日本におけるアメリカとの関係再構築に必要な、「ポストコロニアル的状况から自立を目指す国民」というアイデンティティを提供した点にあったことが検証された。

研究成果の概要(英文)：This research project verifies the need and significance of "national literature" in the Cold-War era Japan and the United States, focusing on the political and cultural role played by the Nobel-prize winner William Faulkner. The research emphatically probes the creating of a nation-wide popularity of the Southern literature in the US and its aftermath upon both countries. Faulkner's anti-communist activities in the 50s depoliticizes the so-called Cold-War ideology and institutionalizes the US modernism as universal literary style based on humanism. By giving a critical reconsideration upon the global situation and the need and reception of Faulkner in both countries, this research reveals how the postwar American literary studies in Japan redefines Faulkner as a representative of a new national ideal and thus accepts literary (re-) colonization process prepared by the US postwar ideologogical operation.

研究分野：20世紀アメリカ南部文学

キーワード：アメリカ南部文学 冷戦 フォークナー 文学的失地回復 『ゴジラ』

1. 研究開始当初の背景

本研究を構想した平成 30 (2018) 年当時は、第二次大戦後のウィリアム・フォークナーの批評的再評価の理由を、冷戦期の日米両国における国民文学創生の必要性という見地から論じた先行研究はほぼ皆無であった。数少ない例外は、1983 年に刊行された米国の批評家 **Laurence H. Schwartz** の *Creating Faulkner's Reputation: The Politics of Modern Literary Criticism (U. of Tennessee P)* と、2014 年に刊行された日本の研究者である越智博美の『モダニズムの南部的瞬間—アメリカ南部詩人と冷戦』(研究社)のみであった。前者は戦後の米国におけるフォークナー・リバイバルを、冷戦期のアメリカの人間主義イデオロギーが齎した、モダニズム文学への評価として位置づけるものであり、フォークナーの再評価の政治的背景を論じた者であった。また後者はサザン・ルネッサンスから冷戦期における南部文学の政治的保守性が、南北戦争後の南部的男性性の復興と結託して文学的文芸復興に到ったことを実証主義的に論証したものであった。但し、いずれの研究もフォークナーが米国のみならず、日本においても一種の国民作家として持て囃されることとなった理由を述べておらず、戦後の日本におけるフォークナーの受容とその高い文学的評価をどのように批判的に理解するかということが、本研究の着眼点であった。こうした見地から、本研究はフォークナーが来日した 1955 年前後の日本の社会的・文化的状況を調査するとともに、フォークナーの訪日とその後のフォークナー研究者、ひいては日本のアメリカ文学研究に与えた影響について、米国南部文学の国民文学化と比較検討しつつ再評価することを企図することとなった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、冷戦期の日米両国における国民文学創生の必要性とその意義について、ウィリアム・フォークナーが合衆国の文化大使として果たした政治的及び文化的役割について、南部文学の国民文学化という観点から再検証するものであった。そのためにまず、冷戦期に国民作家を必要とした日米の政治的・文化的背景を検証し、米国におけるフォークナーの政治的需要が、戦後の日本の文化的統治を目指す米国の冷戦イデオロギーの必然であったことを確認するとともに、そうした米国国務省の政治的要請に応じたフォークナーが、1955 年の日本訪問において、米国が期待した「自由主義陣営の旗印」としての役割を果たしたとともに、戦後の日本において希求されてきた文化人の理想像を創出すべく行動したことを確認することを目的とした。第二に、日本におけるフォークナーの受容が、日本のアメリカ文学研究の制度化に与えた影響を批判的に検証し、フォークナーの来日がアメリカ文学界における一つのエポックメイキングとなったことを確認することを目的とした。最後に本研究は、フォークナーの戦後作品、特に来日時のインタビューや作家の手稿をまとめた **Robert A. Jelliffe** 編の *Faulkner at Nagano* (研究社 1956) に注目し、米国で国民作家たることを期待されたフォークナーが、南部作家としてどのようにそうした期待に応えたかということとともに、その南部作家というペルソナが、来日時にどのような結果を日本人に齎し、日本における「国民作家」としてのフォークナーというイメージを形成したかを確認することを企図した。こうした研究を通じて、米国の自由主義イデオロギーを標榜する国民作家としての理想像と、南北戦争の敗戦の歴史を背負った南部作家としてのアイデンティティとの軋轢を抱えた作家のディレンマと広範な創造性を確認し、従来のフォークナー研究で扱われなかった新たなフォークナー像を探究するとともに、日本のアメリカ文学研究の制度性についてもポストコロニアル的視点から再考することが、本研究の最終的なゴールとなった。

3. 研究の方法

本研究課題に対しては、冷戦期の日米における国民作家・国民文学の必要性の検証、日本のフォークナー受容史再考、及びフォークナーの後期作品の再評価とその影響についての検証の、三つの観点からアプローチした。

一つ目の、冷戦期の日米における国民作家・国民文学の必要性の検証については、関連する文献資料の収集分析を進めるとともに、国内の関連分野の専門家と協力して研究会やワークショップ、講演等を開催し、情報の提供と研究内容に対する助言を受けた。二つ目の、日本のフォークナー受容史再考についても、同様に文献資料の収集分析を行うとともに、フォークナー来日の足跡を長野市に辿り、その記録を具体的に確認した。また最後の、フォークナーの後期作品の再評価とその影響についての検証は、文献実証的研究と併せて、研究会や講演会を行い、その中で他の研究者からのフィードバックを受けつつ、研究の方針と内容を確認した。こうして、主として文献実証的に研究を行った。

4. 研究成果

本研究の実施期間は、当初**2019**(平成**31**)年度から**2021**(令和**3**)年度までの三年間を想定していたが、**2020**年当初からの新型コロナウイルスの世界的流行のため、研究年度を二度に亘って二年間延長し、最終的には**2023**(令和**5**)年度末までかけて所期の目標を達成した。その研究成果の詳細は以下の通りである。

2019年度は、冷戦期における日米国民作家・国民文学の必要性について調査するため、関連文献資料の収集分析を進めるとともに、**10**月の国内学会においてその成果を発表した。またフォークナーの受容史に関しても、米国から制作中のフォークナーの伝記ドキュメンタリー映画製作者兼監督である**Michael Modak-Truran**氏を招いて**8**月に長野市で講演会を開催し、そこから米国における最新のフォークナーの伝記批評の情報を得た。これにより、日米における「国民作家」としてのフォークナーの評価の醸成がどのようになされたかを確認するとともに、フォークナーの**1955**年の日本訪問の足跡を辿り、さらに作家の日本滞在時における業績を再検証することとなった。

1. (研究発表)「日米における国民作家フォークナーの創生 *Faulkner at Nagano* からみる合衆国の文化外交戦略とその受容」,森有礼,日本英文学会中部支部第**71**回大会,単独,**2019**

本発表では、**1955**年のフォークナーの日本訪問が、米国内務省の要請による冷戦期文化外交戦略に基づくものであることを確認した。またフォークナーが来日時に記したエッセイ“*Impressions of Japan*”及びフォークナーの訪日時の記録文献を調査し、作家が日本に抱いていたオリエンタリズムの態度とは裏腹に、当時の日本の文壇及び英米文学研究者が、フォークナーを、敗戦後の日本の行く末を占う文学的泰斗、ひいては日本人にとっての文化的メンターとして受容されており、後の日本国内におけるフォークナー研究の基本的スタンスが、この来日によって方向づけられたことを論証した。

2. (講演会コメンテーター・通訳)“*The Past Is Never Dead: the Story of William Faulkner*”,**Michael Modak-Truran**,金澤哲、相田洋明、森有礼,市立長野図書館講演会「長野を訪れたノーベル賞作家ウィリアム・フォークナーと長野」,共同,**2019**

本講演会は長野市立長野図書館の協力により、フォークナーのドキュメンタリー映画*Faulkner: The Past Is Never Dead*の監督である**Michael Modak-Truran**氏及び彼の撮影スタッフを招聘して行ったものであり、近年の米国による修正主義的観点から撮影されているフォークナーの伝記的ドキュメンタリーについての講演がなされた。当該研究者は同講演会のコメンテーター兼通訳者として参加し、フォークナー研究における米国の新たな動向を確認することができた。また併せて同監督の日本における撮影に同行し、長野県内の各所でフォークナーに縁のある場所を巡ってロケハンを行った。

2020年度は引き続き日本のフォークナー受容史について文献資料調査を進めた。但し、当初この年度に予定していた海外アーカイブの文献調査、及び国内外研究機関での研究発表等の計画は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行のため多くが中止となった。そのため、**3**月に**Zoom**によるオンライン研究発表**1**件を実施し、併せて論文**1**本を研究誌に掲載した。

1. (論文)「日米における国民作家フォークナーの創生—*Faulkner at Nagano* からみる合衆国の文化外交戦略とその受容—」,森 有礼,『中京英文学』,査読有,**1**~**19**,**2020**

本論文は、**2019**年度の研究業績**1**.に加筆訂正を行って論文にして発表したものである。

2. (研究発表)「『日本の印象』研究—フォークナーと『ゴジラ』のレトリック—」,森有礼,フォークナー訪日論集研究会第**1**回研究会,単独,**2021**(**Zoom**によるオンライン開催)

本発表は、フォークナーのエッセイ“*Impressions of Japan*”を基に、作家の来日中に日本で撮影された**U.S.I.S**制作の記録映画*Impressions of Japan*を分析し、同作が、フォークナーを、日本人を教化する文学的・文化的メンターとして表象するとともに、文化的教化を目指すプロパガンダ映画として制作されたことを確認した。また併せて、フォークナー来日前年に公開された怪獣映画『ゴジラ』(**1954**)の中に、敗戦から新たな日本の行く末を見出すというビジョンが描かれており、両作品を並列的に見ることで、日本人の敗戦のトラウマが、フォークナーの訪日によって解消された可能性についても指摘した。

2021年度も引き続き新型コロナウイルスのパンデミックにより、研究計画の進捗が大幅に阻害された。そのため、文献調査を進めるとともに、国際パネル「フォークナー、日本、冷戦」(**2022.11.25**,グラスゴー大学)を聴講し、冷戦期におけるフォークナーと日本の関連について、特に湯川秀樹との面会のエピソードについて論じた発表から、日本における米国の文化政策戦略の実態を確認した。

2022年度は研究期間延長の**1**年目であったが、引き続き新型コロナウイルスの影響で研究活動に大幅な制限を受けた。同年度の研究成果は、**2019**年に来日した**Michael Modak-Truran**氏

監督のドキュメンタリー映画 *Faulkner: The Past Is Never Dead* のプレミア試写会に出席するため、合衆国ミシシッピ州オクスフォードを訪問し、そこで同映画の封切り上映を鑑賞し、またそのプレミアで日本のフォークナー研究者としてコメントしたことである。同映画は、作家フォークナーの生涯を、同作家の伝記群に基づいて再構成したドキュメンタリー映画であるが、近年の修正主義的見地から、フォークナーを南部、ひいてはアメリカ合衆国を代表する作家として描くのではなく、その人種的及びジェンダー的認識の限界を明らかにしつつ、世界各国のフォークナー研究者の最新の見解を交えて、二十世紀前半の南部に生まれ育ち、その社会のイデオロギーの中で形成された人物として再評価するものであり、今次の研究プロジェクトにおいて大きな示唆を得ることとなった。

2023 年度は研究期間を再延長し、本研究の最終年度となった。これまで行ってきた文献調査及び前年度の米国ミシシッピ州でのドキュメンタリー映画視聴に基づき、5月には国内学会のシンポジウムでこれまでの成果を総括した研究発表を、12月には長野市で講演を行った。またその成果を論文として3月に刊行した。これらを通じて、フォークナー訪日の足跡と、そのイベントが戦後のフォークナー研究に果たした意義を検証し、フォークナーの訪日が、冷戦期の米国による自由主義陣営のプロパガンダ展開にあることを確認した。併せて、その訪問が日本においてフォークナー＝米国を自由主義イデオロギーの代弁者として評価する契機となったこと、またそれが戦後の日本人が抱えていた敗戦のトラウマ（それは1954年に封切られた日本初の本格怪獣特撮映画にして戦争映画である『ゴジラ』に表象されていることも論証した）を昇華するとともに、戦後のフォークナー研究をフォークナーという個人の作家性の研究へと方向づけたことを確認した。こうした研究を通じて、戦後のフォークナー研究、ひいては日本のアメリカ文学研究を脱政治化することとなったことも論証し、その枠組のなかでフォークナー研究が戦後の日本とアメリカの政治的関係を反映するポストコロニアル的状况にあると結論づけた。

1. (論文)「奇想」のフォークナー 詩人から作家へ、そして日本での足跡 ,森 有礼,中京英文学,査読有,国際共著(非該当),44,1~12,2023

2. (研究発表)フォークナー訪日の足跡と意義 何が彼に求められていたのか,森 有礼,日本比較文学会 第54回中部大会シンポジウム「ウィリアム・フォークナーの日本訪問余滴 冷戦期文化外交と日本人作家」,単独,2023

3. (講演)「奇想」のフォークナー,森 有礼,市立長野図書館講演会 長野を訪れたノーベル賞作家ウィリアム・フォークナー第2部 フォークナー研究の苦労と楽しみ,共同,2023

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 森 有礼	4. 巻 41号
2. 論文標題 「冷戦期の日本文化外交と国民文学の必要性 - 国民作家フォークナーの創生 - 」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『中京英文学』	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森 有礼
2. 発表標題 「『日本の印象』研究 フォークナーと『ゴジラ』のレトリック 」
3. 学会等名 フォークナー訪日論集研究会第1回研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森 有礼
2. 発表標題 フォークナーと「パターンリズム」 来日記録映画『日本の印象』における「父祖」の政治学
3. 学会等名 英語圏文学研究会（第三期）2019年度第二回研究会議
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森 有礼
2. 発表標題 日米における国民作家フォークナーの創生 Faulkner at Naganoからみる合衆国の文化外交戦略とその受容
3. 学会等名 日本英文学会中部支部第71回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 新・アメリカ文学の古典を読む会編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 282
3. 書名 『物語るちから 新しいアメリカの古典を読む』	

1. 著者名 ジョエル・ウィリアムソン、金澤哲、相田洋明、森有礼ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 538
3. 書名 評伝ウィリアム・フォークナー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------